
第二の人生はゲームらしいです～『イレギュラー』

紅優也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第一の人生はゲームらしいです／『イレギュラー』

【著者名】

紅優也

N4657Z

【あらすじ】

この作品はてんびん座様の『第一の人生はゲームらしいです』に私の作品のキャラをクロスさせた作品です。出来る限りてんびん座様の作風を壊さないよつに頑張りますので生暖かい目で見て下さい。

プロローグ（前書き）

始まりは怒りと交渉

プロローグ

世界の意思SIDE

『……また始めるか。』

『転生者ゲーム。』

神々の気紛れで決められた転生者による気紛れゲーム。

数年前『教授』こと『レン＝ベルツ』による神々に対する反乱を起
こして以来第一の教授の出現を恐れて誰もやらなくなつたが今回は
凄まじ過ぎる教授の進撃に恐れをなした最高神が教授の進撃を止め
よつとしたが世界の崩壊を恐れていたために教授の口車にあつさり
乗せられ再び始める事にしたらしい。

『再び俺が治める世界を戦場に選ぶとは良い度胸をしているな
レン＝ベルツ……』

俺はゆっくりと立ち上がり神界に俺を転送する。

「「ない。」」

「ほお、転生者ゲームをやるのか。

そのゲーム、俺も混ぜてもらおつ。」

俺の言葉に最高神の馬鹿共は絶句しレン＝ベルツは此方を振り向き

「誰だお前は？」
と、言つた。

「（……何だこいつは？）」

俺こと『レン＝ベルツ』は突如絶句した一人の最高神の視線の方向に振り向いたらそこには絶句している「人とは比べ物にならない程の威圧感を誇る男（と、言うよりは『漢』だな）が立っていた。

「誰だお前は？」

「俺か？」

俺はお前達が転生者ゲームを行う世界『魔法少女リリカルなのは』の全ての世界を治める『世界の意思』だ。
そこの馬鹿一人とは色々と因縁があつてな。

あと言葉に気を付ける若造。」

男『世界の意思』が溜め息を吐きながら俺に注意をする。

「はん！

てめえなんざが出る幕じゃねえんだよ！死ね！」
言いながら俺の部下である『ライア＝ベルツ』が飛び掛かり……俺と俺やライアと一緒に来ていた部下の一人『ルナ＝ベルツ』の上をライアが飛び越えていった。

「…………は？」

「ふん、貴様の部下は口は一人前だが腕は半人前以下だな。
俺の実力を見切れんとは。」

ポカーンとした表情で吹っ飛んでいったライアを見ていた俺とルナにパンパンと手に付いた埃を落としながら世界の意思が言った。

「一応言つておくが貴様等が俺の転生者ゲームへの参加を認めなかつた場合は即座にお前達全員の転生者が俺の管理する世界に入れぬ様に『拒絶』をかけて戦い事態を成り立たなくさせてやる。」

ち、面倒くさい奴が介入してきたものだぜ。

「…………しうがりませんね、許可します。」

「ち……好きにすれば良いだろ。」

「ち……戦い事態が成り立たなくなるよりは増しだ。
参加しろよ。」

最高神達も俺も渋々ながら世界の意思の転生者ゲームへの参加を許可する。

「ふん、当然だ。

ルールを決める際は俺も呼べよ。」

そつと世界の意思は自身を「転送していった。

「がああああああああああああああ！」

あんの糞野郎が！絶対に『ギャフン』と言わせてやる！

「そうですね～～あいつの泣きつ面を見てみたいものです。」

世界の意思が去るとライアは猛り狂いルナは冷たい殺氣を発する。

「お前等』今は『落ち着け。」

俺は一人を宥めながら他の部下が入るとじろりまで転送した。

続く

プロローグ（後書き）

如何でしたか？

次回は世界の意思の転生者が明らかになります。

次回『転生者は迷惑を掛けた奴』

お楽しみ！

第一話（前書き）

転生者は迷惑を掛けた奴

第一話

世界の意思SIDE

よつ、世界の意思だ。

俺は今レン＝ベルツや馬鹿一人とルールについて決めてきた所だ。

因みにルールだ。

『転生者は同じ年齢とする。』

『転生者は無印、A、S、StSまでは最低でも辿らせる事。』

『転生者は殺さなくとも降伏、若しくは勝手に死んでも敗北とする。転生者は降伏したら神と話したりした事や特典についての全ての記憶を失つ。』

『転生者は現地では自身が転生者だと知られてはならない（知られた場合は降伏した場合と同じ罰を与えられる）。』

『転生者の肉体は死亡する直前若しくは直後とする。（なお、破つた場合はその転生者を転生させた神は問答無用で敗北とする。）』

『転生者に対する特典は三つとする。』

増やす事も減らす事も禁ずる。

（破つた場合はその神は問答無用で敗北とする。）』

が、ルールだ。

因みに（）内の言葉は全て俺が提案したルールで馬鹿共が承認した。レン＝ベルツの事だから下手をしたらルール無用のやり方をしかねんしな。

まあ……

「奴等が転生させる奴は分かり切つてゐるがな。」

レン＝ベルツは恐らく奴が所有する天使共の内一人を転生者として登録するだろう。

赤毛の最高神はそれを予測して絶対にレン＝ベルツに對して恨みを持つもの……即ち前回の転生者ゲームでレン＝ベルツにこてんぱんにやられた奴等の内一人を自身の転生者に仕立てあげるだろう。

金髪碧眼の最高神はその逆手を取り恐らく原作キャラの身内になりそうな奴を自身の転生者に仕立てあげ何もできないようにするに違いない。

「ふむ……」

予測出来たとしても俺がこのゲームについて素人なのは否めん。
誰を転生者にすべきか……ん？転生者？

「『田には田を歯には歯を魔導士には魔導士を転生者には転生者殺し』だ！」

奴を使おう！

ゼロムSHIDE

……

「つで、僕なんですか！」

「つで、お前なんだ。」

僕『ゼロム・グラシアム』は田の前で一ノ口一ノ口笑つてゐる人『世界の意思』を見ながら突つ込みを決めた。

いきなり『来い!』と言われてこの空間に連れ攫われてみれば『転生者ゲームに参加しろ!』と言われるし……はあ。

「まあ、僕に拒否権は無いんですけどね。」

「まあな。」

世界の意思は僕が『レイス・クロフォード』によつて『アスラクライン』の世界に吹き飛ばされた際に再びこの世界に帰れる様にしてくれた恩があるから断る訳にはいかないんだよね。

「で……望む特典は何だ?」

『特典』……第一の人生を生き残る為のキーカード……

「……皆の能力や魔法を『神の卵』^{ハンブティ・ダンブティ}に登録しておいて下さい。」

一つ目は単純に僕のレアスキルの強化。

皆の能力があれば此方にぐつと有利になる。

「解った。二つ目は何だ?」

「二つ目は……八神部隊長の弟として転生させて下さい。」

『P.T.事件』から始めるのなら両方と戦いやすい人間の家に転生する方が利口な方法だろ?つ。

「相変わらず頭良いなお前は。」

「最後は何だ?」

「デバイスは最初から所持で『ゼロ』と『リイン』を使わせて下さい。」

今までずっと一緒に戦ってきた一人を今更使わないなんていう法律は無い。

「まあ、妥当な願いだよな。」

世界の意思は「ほんと一息おいた後……」

「適当に逝つていい。」

え？ 字が違……

僕の意識はそこで途切れた。

続く

第一話（後書き）

如何でしたか？

次回はゼロムが負け犬剣士こと『河内亮』と最強転生者」と『高町星』に遭遇しますが戦闘はしません。

次回『温泉と予言とニユータイプ』
お楽しみに！

第一話（前書き）

温泉と右ストレートと左コーナータイプ

零 S I D E ゼロム

僕『ゼロム・グラシアム』こと『八神零』は只今姉である『八神はやて』と一緒に温泉に来ておりました。

「零~~~~はよ温泉行こりや~~~~!」

マスター……心中お察しします。

あじかと、セロ...

因みにリインやゼロは四歳の誕生日の時に父さんがくれたペンダン
トがゼロだった。リインは元から傍にいるといつおまけ付きである。

「はあ……もういいよ解ったよ。
入るよ入るからこの手を離して。」

はやて姉さんに強引に温泉の暖簾の前まで連れてこられた僕は観念して温泉に入る事にした。

「……零は知らんやろ？」

何を？

「十一歳までは混浴OKなんよ温泉つて」

.....
忘
れ
て
た
！

「ほな、入りましょ

卷之三

.....

誰かが入ってきたら僕は『何で入ってるの！（怒）』とか言われて怒られるのでは無いかとヒヤヒヤしている。

「う～～ん！ 気持ち良いなあ～～！」

そんな僕の気も知らず強引は連れてきた如は僕の非難の視線はも何処吹く風だつた。

「わっ……出て男湯に入るよ。」

あ……もう……もうねえい姉弟のスキンシップしちゃうやん。」「姉ちゃんが強引に連れてきたよなに何を壇の豆か。」

業の見聞一不一業の見聞

僕は脱衣場への扉を開け……僕の視界一杯に飛び込んできたのは幼い頃の高町一等空尉と友人の『アリサ・バニングス』さんと『月村すずか』さんと『星』さんとそれから見知らぬ少年の裸体だつた。

「あ

しまつた誰かが入つてくるのを完全に失念してた。

「あー、キヤアああああああああああああああああー。」

ボカン！

僕は高町一等空尉の右ストレーテを受け漫画の様に宙を舞つた。
流石高町一等空尉……幼少とは言え良い拳をしてます。

僕は温泉に思つたり体を叩きつけられながらうつ思つた。

亮《負け犬》 SHDE

「い、ごめん！痛くない？」

「う、うん。（本当は頬が激しく痛いです……）」

「もう、慌てて出るからそうなるんやで？」

「いや、姉さんが強引に僕を連れてきた所為だと思ひナダ？」

俺『河内亮』は風呂から出ようとしてなのは達の裸体を見てしまつた為になのはにぶん殴られて漫画の様に宙を舞つた少年『八神零』にある疑いをかけていた。だつてそつだり？
はやてに弟なんていないしそもそもはやてとなのははこんな出会い方をしない。

そして……一番ムカつく事はなのはが頬を赤らめている事だ。

「（……まてよ？

何でこいつは出会つて間もないなのは達に打ち解けてるんだ？）
なのは達の話を聞いていると何だか零はなのは達の好みや性格を把握している様に思える。

はやては姉だからつてちやんとした理由があるからまだ良いとしてなのは達はおかし過ぎる。

「（まさかこいつは……『教授』の……『ベルツ』側の転生者の仲間か！？）

だとしたらなのは達に打ち解けているのは後に機動六課に入つた際

に裏切りを行うのに絶好のポジションを得るためだと解釈できるし
なのは達にフラグを建てれば管理局を裏切らせるのも容易いからだ。

「（くそ！ふざけやがってその温和な顔の下にどんな狡猾な策を隠
してやがる！

なのは達は絶対に俺が守る！）

八神零……お前の化けの皮は絶対に剥いで切り刻んでやるぜ！

零SIDE

「（本当に便利だな『ニュー・タイプ』つて。）

僕は今転生者の一人である『河内亮』の心を覗いてみたんだけど（
僕に完璧な敵意を向けていたからだ）……疑われたもんだね。

「（『教授』、『ベルジ』。

これはもう一人の転生者の所有神だと考えて良いな。）

『高町星』さんも転生者だらうけど今は転生者四人が揃つてから行

動した方が良いだろ？

二人を此処で片付けても良いんだけど教授側の転生者が洒落になら
ない強さだったら大変だしその時の都合の良い生け贅みがわりがないとね。

「じゃ、姉さん僕は出るよ。」

「ん、ちゃんと体を良く拭くんやで？」

「解つて……はれれれれ……？」

温泉から出ようとしたら視界が揺れ倒れそうになる。あ、逆上せた
のか……

なのは（名前呼びを許可された）が僕を慌てて支えようとして……

僕が押し倒す形になり唇が重なった。

はやて姉さんの悲鳴を聞きながら僕の意識は途絶えた。
（因みに僕は今六歳です。）

目を覚ましたらなのはが顔を深紅に染めて隣に座っていた。

「何て？」

浴衣は此廻の備え付けだろうし、布団がかけられているのは逆上せたからだろうけど……

「何でなのはがいるの？」

「はあ……貴方がなのはの唇に重ねちゃって氣絶した後なのはも真っ赤になつて氣絶したんですよ。」

何時の間に来たのか屋さんかそこにしてた

思へ出されるのは、國の柔らかさ。そして何故か高鳴る胸の鼓動。

「すいまつせんでしたああああああああああああああ！」

地下座

「何で！？」

重なる二人の声（流石姉妹だね）

「いや……その……六歳なの」「アーストキスを奪つちやつたから

卷之三

僕は顔が赤くなるのを感じながら土下座の理由を述べる。

「????それがいけない事なの？」

「（……多分十五、六歳で転生しましたね）この子は。」

なのは……君はファーストキスの意味を知らない。

それから星さん、それは自分が転生者つて事をバラす様な考えですよ？

「そ、それは今は置いといて。

あ、あのね零君……その家に食べに来てくれない？」

なのはさん（僕の世界ね？）の実家は『翡翠屋』っていうケーキ屋を営んでいて（最初は僕も『三ハネ』も『ペテロ』も『嘘だ～～～』。『』と思つてたけど本当だった。）前世では良く利用していた。

「え？別に良いけど……」

「本当！？ありがとう！」

「ヨーローロと笑うなのはに何だか胸がドキドキする僕だった。

（「『やつぱりゼロム（君）つて朴念人だな（だよね）』。」「頭に現れた『織斑』さん、『吉井』さん、『衛門』さんの二人は殴り倒した。

にしても……なのはの家に行つたその日に戦闘になるとはね……

続く

第一話（後書き）

如何でしたか？

因みにこの作品のヒロインはなのはです。

次回は零がルナに遭遇し三人と戦闘します（因みにその時亮をぼっこにします）。

次回『遭遇と忘れと本家との差』
お楽しみに！

第三話（前書き）

遭遇と忘れと本家との差
負け犬超アンチです！

第二話

零SIDE

僕は今のはと星さんに連れられ姉さんと一緒に二人の家の『翠屋』（こりや）へは世界の違いか？）に来ていた。

「はあ……」

「何や溜め息なんて幸せが逃げて行くで……？」

姉さん、貴方は此処にいる男子が僕だけだという事を気にしないからそう言える。

因みに河内亮は何か用事があるとかいつて帰った。

「うう……緊張するなあ……」

考へていてる内になのはが扉を開けて僕らを招き入れる。

やれやれ……此処まで来たからには腹を括るしか無いよね！

……

ルナSIDE

今日は『ルナ』ベルツ』です。

私は翠屋にシュークリームを食べに来た所です（因みに私が作ったのよりも美味しかったので軽い敗北感を味わいました）……て、誰に説明しているんでしょうか私は？

すると店に三人の女の子と一人の男の子が入ってきました。

二人は見覚えがあります。

高町なのはと八神はやて……あれ？

「一人つてこの段階で知り合いでしたっけ……？」

私はもう一人を見て危うく飲んでいたコーヒーを吹き出す所でした。

「ん？ああ、なのはに星……友達か？」
何故力ウンターにいる青年はハ神はやてに似た少年に殺氣を飛ばす
んでしょうか？」

「あ、うん。そうだよ。」

「や、『ハ神零』と申します宜しくお願ひします。」

「ハ神はやて言ひます宜しくお願ひします。」

星さんに零さん……星さんはなのはさんに似た容姿を持つています
が髪はショートカットです。

零さんはハ神はやてに似た容姿を持つていますが此方は銀髪を背中
まで伸ばしているのでうつかりすると女の子にも見えてします
(ここら辺には私は親近感を持てます)。

私はなのはさんもはやてさんも双子とは聞いていないので十中八九
転生者ですね～～～。

「(早速見付けました～～～。)」

『(どうします？今仕掛けますか？)』

と、私のデバイスである『アルテミス』が聞いてくる。

「(いえいえあの性悪の『世界の意思』とかが選んだりした転生者
ですよ？)」

そんなに簡単に上手く行くわけがありません。
……少し探りますか。

私は周囲に他の客がいるのを確認し……全力で殺氣を出しました。

星さんは椅子をガタン！と言わせて立ち上がり……あれ？零さんが立ち上がりませんね～～～？

因みになのはさんとはやてさんはきょとんとしていました。それからカウンターの青年はキヨロキヨロと店内を見回していました。

何ですかこの店は？

超人喫茶か何かですか？

まあ、これで星さんの力量は解りました恐らく彼女は純粹な魔導士か半人前でしょう。

零さんについては……今は保留にしておきましょう。

私は残つたコーヒーを飲み干し……その瞬間封鎖結界が発動しました。

零SIDE

「（殺氣……こつちが反応するかどうか見てるねあの人。）」

ベルツ側の転生者の人、甘いよ。

僕は『白獅子事件』の際にその手でシグナムさんにばれて戦闘を強いられたんだからのるわけが無い。

だけど案の定と言うべきか言わざるべきか……星さんは椅子をガタン！と鳴らして立ち上がった。

因みに恭也さんは店内を見回した。

相変わらず武術の達人が多いよねなのはさんの家族つて。

「（さてと……）」

僕は腰のポーチに手を入れてUSBメモリの様な物体……『ガイアメモリ』の内『S』と書かれたメモリを取り出す。

そして封鎖結界が発動したので……

「（‘）めん、皆。」

『ストップ！！』

瞬間封鎖結界の中（因みに封鎖結界の中の人には解らない）と転生者以外は全て僕が使つたガイアメモリ……『停止の記憶』を持つ『ストップ』のメモリの効果により動きが止まる。

「ん？どうやら星さんと他一名は外に出たみたいだね。」
お金を置いていく辺りが律儀だ。

「さてと……『ライアーズマスク』。

僕は神の卵に内蔵されている力を使い前世の顔にして八神零だとばれないとする。

「さて……『ライガーゼロ・改』セットアップ！武装は『イエーガー

ー』！リイン、行くよ！ニギンキン！」

『了解です、マスター。』

『はいです！』

ゼロは『ペンドント』からリインは『僕の影』から答え僕の体に黒い外套とブースターが大量に着いているネイビーブルーの鎧が装備され更に装甲に銀色が追加される。

「さーーーと…」

『アクセル！！』

僕は『加速の記憶』を持つ『アクセル』メモリを使いイエーガーの最大加速を越えたスピードで二人を追い始めた。

僕が現場である『海浜公園』に来た時は既に戦いは始まっていたけど……

「貴方誰でしたっけ？」

ベルツ側の転生者が河内亮に首を傾げている場面に遭遇した。

「誰、だと……？」

「あ、すいません～～～初対面の人には挨拶をしませんとね！
私の名前は『ルナ』＝ベルツです～。」
ふむ……と、すると『教授』が敵の名前か。

「……テメエ、ふざけるな！～！」

無理だよ河内亮。

踏まれた人間は忘れにくいけど踏んだ本人は忘れやすいんだよ。
最もルナ＝ベルツは他人を戦車で踏み潰しても忘れてそういうけど。

「まさか……本当に覚えて無いのか？」

「だから貴方とは初対面ですって。」

うん。完璧にルナ＝ベルツは君の事を忘れてるね。

「俺だ！俺！河内亮だ！」

「河内さんですか……誰でしたっけ～～？」
本当に最低な人間ですね貴方は。

「ふ、ざけんな！

力尽くで思い出させてやる！」

そして二人は剣を重ね合つけど河内亮もルナ＝ベルツも中々の使い手だ織斑さんや衛宮さんと良い勝負をするかもしれない。

だけど……

「そんな小さな腕や足で適うと思ひますか～～～？」

リーチが違い過ぎる。

多分変身魔法を使って大人になつてゐるんだろうけど先ず剣は腕が互角の場合は距離が勝敗を分ける。

あつたり河内亮が蹴り飛ばされそのままルナ＝ベルツが近寄り……ん？手を覗して何をするつもりだ？

「食らいやがれ！」AICO『ー』

……あ？

次の瞬間バインドも使われていないのでルナ＝ベルツの体が止められる。

……ふざけるなよ？

その力は『ラウラ』さんの象徴なんだ！お前が使っていい力じゃないんだよ！

「やれ、星！」

「『ブラストファイヤー』！！」

な！？デバイス無しで砲撃！？どんなチートだよ！？

『リジエクション』

だけどルナ＝ベルツはシールドを斜めに展開する事であつたり防いだ。

そしてAICOが凍り付き砕け散つた。

「ふむ、中々の腕前ですがそれが本気なら興醒めです～～～。取り敢えず二人仲良くジ・エンドです。」

「誰が！」

ジ・エンドはテメエだ！」

そして猿真似野郎の前に『ミッドチルダ式』の魔方陣が複数出現して……何も起こらない……？

めねか

「……？」

ルナ"ベルツ"が吹き飛ばされる。
やつぱり……

「言つ必要は無いかもしませんがあれは『鈴』様の『龍砲』です。」
「そうか……ははは……そうかよ！」

マスター。

僕は隠れていた茂みから飛び出し……

思いつきり猿真似野郎を殴り飛はした

亮《負け犬》 SIDE

ルナ!! ベルツに俺が新たに得た力を披露したら突如脇から殴り飛ばされた。

「…」

「テメエ……何者だ！」
「僕か？僕の名は『ゼロム・グラシアム』！」

君達と同じ転生者だ……。」

「何だって！？」

ハ神零は転生者じゃないのか！？

「え！？じゃあハ神零は何者ですか！？」

ルナも驚いたらしく珍しくアイツが慌てていた。

「ふん、お前達が言つてこいつの『オリキヤラ』って存在じゃないかな？」

オリキヤラ……そうか、俺やルナつていうイレギュラーが入るんだ。当然な答えかもしねり。

「待てよ……猿真似つてどういふ意味だテメエ！」

「そのままの意味だ。

お前がその能力を使う事は『IIS』^{インフィニッシュ・ストライク}のキャラクターを侮辱しているのと同じ事だ。」

「テメエ……！」

舐めんなああああああああああああああああ！龍「はあ……」こんな馬鹿に龍砲を使われる鈴さんも不幸だな。らあ！「ごふうー？」俺が龍砲を使おうとしたらゼロム・グラシアムが接近していた。

何……で？

「ふん、素早い相手には自らの動きを固定してしまう龍砲は不利なんだよ。

使い手ならそれ位覚えとけ。」

「ぐ……舐めんな！」

『ブルーティアーズ』！

俺はビットを出しゼロムに向かわせる『セシリア』との違いは俺も動ける事だぜ！

「馬鹿が。」

一瞬で四つのビットを全て爪で碎いたゼロムは神速でやつてきて俺を蹴りうとして……俺はAICOを使い止める。

「……お前は多分噛ませ犬だな。」

何とAICOを振り切りそのまま俺に蹴りを決めた。

「「」……ふ……」

「……『セシリア』さんは動けなくともビットの動きは複雑で精緻でそしてコンビネーションも抜群だった『ラウラ』さんは使われたら身動きすら取れなかつた。

……お前は中途半端な猿真似なんだよ……」

猿真似……違う！

さつきまでは新しい力だつたからだ！
最初から持つっていた力は負けない！

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！『零落白夜』……」

「……『輻射波動』。」

バリアなんか効くかよ！
ガギン！

「な……！あ……あ……」

「所詮は猿真似、出力最大とはいえまさか輻射波動で作ったバリアを切り裂けないとはね。」

俺の刃は……赤いバリアに一ミリもめり込んでいなかつた。

「……失せろ。鳴り響け……終焉の笛！『ラグナロクブレイカー』

！」

俺ははやての必殺魔法を受け氣絶した。

続
<

第三話（後書き）

如何でしたか？

次回は戦闘はありません。

次回『原作開始まで残り一年』、それぞれの光景

お楽しみ！

第四話（前書き）

原作開始まで残り一年、それぞれの光景

第四話

零 ^{ゼロム} SIDE

「P.T.事件まで残り一年か……」

僕ははやて姉さん（因みに足は一年前に悪くなってしまった……）が寝静まつた隙を狙つて無人の『管理外世界』に来ていた。目的？闇の書を速く集めるための魔力を貯める為だよ？

下手に『闇の書事件』を長引かせたらなのはや星さんが危険だし（僕達転生者の魔法を吸収したらリインさんが手を付けられない強さになつちやうからだ）織斑さん達の能力の猿真似野郎『河内亮』を『S七S編』……まあつまり『機動六課』が編成された時に八つ裂きにするためだよ？

因みにあの後『ラグナロクブレイカー』で猿真似野郎を吹き飛ばしたけど殺す前に星さんが正確無比な砲撃を加えてきてさつさと撤退せざるおえなかつた。

あ、『ストップメモリ』で止めた時間はちゃんと戻しといたよ？それからなのは『何時でも遊びに来て良いよ！』って言ってたけど僕は餓えたライオン一匹（土郎さんと恭也さんね？）の『妹（娘）』に手を出したら許さんぞ~~~~~？』という視線を毎回受けているら本気で身が保たないと思つ。

なので外堀（一人と仲良くなる事）を埋める事から始めている（でないところに遊べないからね……）。

『マスター。

河内亮のデータを集めました。』

序でに言つとさつきまで僕は猿真似野郎のデータに興味が出たので『時空管理局』のデータベースにハッキングを仕掛けいた。

「ふううん……母親が『デバイスマイスター』で父親がこっちの
人間だけど『魔力持ち』で『執務官』。

但し父親は既に殉職してるけど『リンティ』さん……というより『
クライド』さんの知り合いだった……通りでデバイスを持つてる訳
だ。

どうせ誕生日とかで母親にねだつて作つてもらつたんだろうけどね。

「たく……厄介な奴だよ。

うかうかしてたらこつちは時空管理局全てを敵に回してしまつ。

「はあ……昔は『アラン』さんに『秦』さんに『アルテマ』さん達
がいたからどうにかなつたけど……1人は辛いな……」

感情を捨てていた『白獅子』の頃ならこんなのが苦にならなかつただ
らうけどね……

「ま、どうにかなるぞ。」

僕はかつて共に転生者達と戦つた仲間達（とその恋人達）を思い浮
かべながら立ち上がり家に帰る為に転送魔法を展開した。

ルナSIDE

「うへへへむ……原作開始まで残り一年ですか……」

正直言つて面倒ですが……奴『ゼロム・グラシアム』はなんとして
も倒さないと下手をすればこつちが撃破されかねません。

何故か私に凄く執着している河内さんを瞬殺した強さからして前世
はベテランの戦士だったに違いありません。（注：ゼロムは元々優
れた戦略眼や戦闘能力を有していたがそれが転生者達との死闘で一
気に開花したためなのでベテランの戦士ではない。）

『で、どう動くのつもりですかマスター？』

アルテミスの問いに私は……

「取り敢えず先ずは一人でも減らします。

その後は……ま、どうにでもなるでしょう。」

最悪『ルル』と『ナナ』に出てもらひつといふ手も無くはありませんが活躍させるのは『A』、『編』からですしね。

それに……

「ゼロム・グラシアム……久々ですよ」こんなにぞくぞくする敵に相対するのは……（にやり）

あの性悪男『世界の意思』が選んだ転生者がどんな奴かと思つたら……とんでもない奴で安心しました。

「くすくすくす……この戦い……楽しみが出来ましたね～～」

私はゼロム・グラシアムとは良いライバルになれそうだという確信めいた笑いをしました。

星SIDE

私は今なのは達と一緒に温泉に来ていた。

因みに家族ぐるみなので『アリサ』や『すずか』、亮の家族も全員来ている。（最も亮は親子二人暮しだけど……）

ハ神零は『姉さんの世話があるから行かない。』と言つていたが何時のために姉のハ神はやが仕込んだのかお茶に入っていた『睡眠薬』でぐつすり寝込んだ所を私達が連れてきた（因みにハ神はやは私はに『なのはちゃんと零の恋の懸け橋にならつや』と楽しそうな表情で言つた。）。

そして皆で温泉を堪能した後私達はこつそり宿を抜け出し川原に来ていた。

今回の温泉は唯旅行をするための物では無く調査の意味合いもある。

「此処であつていいのですか？」

「ああ、間違いない。

此処で一年後に『ジユエルシード』が暴走する。

そしてなのはと『フェイト』が奪い合つ。

亮がはつきりと言つた。

ゼロム・グラシアムに完膚なきまで叩き潰されて以来絶望に打ち拉がれていた彼ですが最近は何とか持ち直してきたみたいです。

「解りましたでは……時を……」「へえ、まだ生きてたんだ猿真似野郎。」「！？」

驚いて振り向くとそこには亮を瞬殺し絶望に叩き落とした張本人ゼロム・グラシアムが立っていた。

「……何の用だ？」

「ああ、ちょっとしたご挨拶。

僕は無印とA'sでは君達に手を出すつもりは無いよ……S to Sでは遠慮も容赦も情けも一切無く粉碎するつもりだけど。」「ゼロムが亮の問いにせりりと答える。

「それから星さん。

河内亮に恋心を持つなら今の内だよ？」

！？な、何故八神零にしか話していない事を知つているんですか！？

「簡単な事だよ？」

八神零に『ギアス』を掛けて聞いたんだ。」「

「な、何て卑劣な！？！／／／」

私は顔が暑くなるのを感じながら言いました。

「何だかヤバ、そんな空氣が出てるんで……アテイオス……」
「一度と来るな！！！！／＼／＼」

私は即座に『アクセルショーター』を走り去つていぐゼロム・グラ
シアムの背中に目がけて撃ちますが、あつさり防がれました。
ゴキブリみたいな逃げ足の速さですね……次にあつたら星塵にして
あげます！！

私は密かにそんな事を思いながら亮に対する想いもつのらせていつ
ている事に気付いてすらいなかつた。

続く

第四話（後書き）

如何でしたか？

次回はゼロムが前世でのもう一つのデバイスを手に入れます。

次回『永遠と再臨』

お楽しみに！

第五話（前書き）

永遠と再臨

「（今日からPT事件の始まりか……）」

僕はバスの車内で春の穏やかな日光を顔に受けて眠気を感じながら考えていた。

「（昨日になつて思い出したよ……僕が『八神零』としてPT事件に介入するにはもう一つデバイスが必要だつて事……）」

『八神零』が転生者では無いと言つた以上ゼロを使つたら絶対に僕が『ゼロム・グラシアム』だと猿真似野郎やルナルベルツに気付かれる。

「（あ……良く考えたら何でガイアメモリはあるのに『リヴァイブ』は無いんだろう？）」

ガイアメモリは単体で使つても確かに強力だけど本来『ペテロ』が作つてくれたガイアメモリの能力を最大にまで引き上げる僕のもう一つのデバイスが無ければ下手をすれば暴走するのだ。

「（あ……どうしたら良いんだ？……）」

「零君……一体どうしたの？
さつきから難しい顔をして？」

「ふえあ！？／／／」

考え事をしていたらなのはの顔が目の前に出て来たのでつい素つ頓狂な声を上げてしまった。

「えと……新しいクラスに馴染めるかどうか心配で……」

「そつなんだ／＼私も心配だけど零君が一緒なら何処でも良いよ

（「ハーツ」）

「んな！？／＼／＼／＼」

なのはの最高の笑顔+多分男が聞いたら自分に好意を持つてると思
う言葉を言われて僕は顔が暑くなつた。

「？何で零君の顔が赤くなるの？」

「なのは……あんたといい零といこ……鈍感過ぎ……」

アリサがなのはの肩をポンと呑きため息を吐く。

「本当ね。（なのは、もう零君に告白すれば？）」

「ふえ！？／＼／＼（無理だよ……だつて……断られた事を考えたら
……怖いよ……）」

すずかがなのはに何かをぼそりと告げるとなのはの顔が深紅に染ま
りあたふたと僕から離れていった。

「？？？なのはは一体どうしたんだろう？」

「（離して下さこ亮！

あの鈍感を星屑にしないと気が済みません！）」

「（落ち着け星！

今此処で魔法を使うおうとするなー！）」

因みに猿真似野郎と星さんは何でか猿真似野郎が星さんを羽交い締
めにしていた。

「（ま、いつか。

デバイスの事本当にビリしよハーツー！）」

僕は未だに残つてゐる難問にまた頭を悩ませる羽田になつた。

「……あれ、零君……その……今日……私の家に泊まりに来ない？／＼／＼」
昼休みになのはが顔を赤くしながら言った一言で僕の思考回路は完全にフリーズした。

「え、あ、えと何でいきなりそ、それに姉さんの世話が……」

貴方は壊れかけのポンコツロボットですか？

それから八神はやてに昨日電話したら『お泊まり? 別にええで?』

「……風はお、さ、言ひを聽いて、お、」

流石にその答えはまるで予測してなかつたよ！？

まさか『別にええで?』と言つとは思わなかつたよ畜生!一

「か、家族は！？なのは達の家族の許可は！？」

僕となのはがキスをした事を知った瞬間……狂戦士と化した恭也さんと士郎さんが木刀と小刀を引き抜いて問答無用で僕に襲い掛かつて記憶はまだ新しい。

「うん……お父さんとお兄ちゃんが通対したんだナビ

「ゆれんが『おみと交渉するわ』と聞いて交渉したんですが……」

「すぐに帰つて来て『お泊まりを許してくれたわ』って言つて……」

金子ノ兄弟ノ口傳之食の由リハシテアリカ一此ノ采種ノ力

『桃子』さん 費女は一体何をしたんですか?

僕は初めて会つた際に危うく士郎さんを通報しそうに成る程に若々しいなのはの母親を思い出し頭が痛くなつた。

「只今~~~~。」

「零、お帰り~~~~。」

僕は泊まりの準備をするために一度家に帰る事にした。（最も今）
るなのは達は『コーン』さんに会つてゐんだらうけど……）

「でね姉さん……『お泊まり？別にええで？』って……僕の世話は
いらないって事？」

昼休みが終わつてからずつと気になつていていた事だけ僕にとつては
ある意味都合が良い（何時でも好きな時に抜け出せるし猿真似達と
何時でも戦えるからだ。）けどね。

「…………」

あれ？ 黙り？

「…………」

「（ぼそつ）零は……頑張り過ぎやわ。」
「え？」

「だつて……お父さんとお母さんが死んで私が足を悪くして以来零
はなのはちやん達と全然遊ばないし私の世話の為に学校終わつたら
さつむと帰つてくるし……たまには休むちゅう事をしてや？
だから私は星ちゃんの提案をあつさり受け入れたんよ。」

「姉さん……」

そつか……僕は……姉さんにそこまで愛されていたのか……

「ありがとう……姉さん。」

「どういたしましてや。」

それからお土産の『翠屋のケーキ』ようじゅうな？

「絶対にそれも受け入れた要因の一つだよねー？」

といつかそれがメインの様な気がするのは気のせいー？

はやてSHOGE

「行つて来ます！！（怒）」

「い、行つてらつしゃい～～～。（焦）」

私が『ハ神はやて』はわつきの発言でがつづり怒つた『ハ神零』がなのはちやん家に行くのを見送つた。

「あ、それから僕がいからつて夜更かししづやダメだよ。」
ち、鋭いわ。

「解つとるよ。

零もなのはちやんの家族に迷惑かけちやダメやで？」

「解つてるよ。

じゃあ今度こそ行つて来ます。」

「ん、今度こそ行つてらつしゃい。」

そう言つて零は出でていつた。

「はあ……」

私は車椅子の背に体を預けつゝ思つ。

「（本当に零は罪作りやで……なのはちやんみたいな綺麗な女の子
好きにさせといて気付かないなんてな……）

実の弟ながら姉の私がなんかのはちやんに申し訳ない気持ちにな
る。

「……零……幸せにな。」

私は絶対に治らないであろう足を見ながらひそつ呟いた。

現在僕は『ジユエルシード』の暴走体になのは、星さん共々追い掛け回されていた。

え？ 話が飛び過ぎだつて？

しうがないじゃん話す事があんまり無いんだから。

因みに何でこんな事になつたかつて言つと夜になのはと星さんの部屋で寝ていたらなのはが『フェレット（コーノさん）さんが気に入る。』と言つて家を出でていつてコーノさんのいる動物病院に三人で来てみて見たのは見事に廃墟となつた病院とそこに立つジユエルシードの暴走体だつた。

「はあ……はあ……」めん一人とも私が我が儘を言つたばかりに……

なのはが息を切らせながら僕等に謝る。

「大丈夫だよ。

勝手に着いてきただけだしこれはなのはの責任じゃなによ。」

「本当にそうですよ。」

僕も星さんも全力で走りながらなのはに……？

「危ない！」

僕は慌ててなのはを突き飛ばし……

「ドゴン……

「が……あ……！」

僕はジユエルシードが振るつた拳で漫画の様に宙を舞つた。

「れ、零君！？」

「八神零！！」

二人の悲鳴が辺りに響き渡りジュエルシードが一人に向けて拳を振るうけど猿真似野郎が寸でのところで銀色の盾で受け止めそのまま戦闘に入った。

「畜生……！」

僕が……ゼロを使えれば……一人を守る力があれば！！

「マスターゼロム……いえマスター零、ライガーゼロだけしか頼ら

え
?

そんな…………まさか…………

四

お久しぶりです。

「リヴァイブ」?

僕は本来此処には無い

僕は本来此処には無いはずのもう一つの相棒の名前を言う。

イエス。

あはは 良かつた。

「
」

「こいつも河内君と同じ……力なのかな？」

僕は「アーティ」を知っていると懶けたしよ」は芝居を打つ

『メモリスロットに『永遠の記憶』を装填して下さい。』

僕はリヴィアイブの基本形態である小手を装備しそこにある四つのスロットの一つに『永遠の記憶』を持つ『エターナルメモリ』を入れ

る。

『エターナル！！』

『永遠の記憶を確認。』

リヴァイブハートゲットレディ……セットアップ！』

「行くぞおおおおおおおおおおおおおおーー！」

僕はジュエルシードと猿真似野郎が戦闘している最中に突撃した。

「零君！良かつた……」

「なのは……（撫で撫で）」

「て、二人とも！早く契約を進めてくれ！」

ユーノさんの声に二人は我に帰り契約の続きを始めた。

亮《負け犬》 SIDE

「亮！」

俺が最初のジュエルシードと戦闘をしていると零が長剣を構えながら走ってきた。

何だあのデバイス！？

見た事無いぞ！？

そう形自体は大したことは無い。

問題はだ……ガイアメモリを接続しているデバイス何て見た事が無いだけだ。

「零！無事だつたんだな！」

「まあ、にしてもデカい……」

俺達はジュエルシードから振り下ろされる拳を回避しながら話し合う。

「えーと……リヴァイブハートだつけ？ どうすれば良いの？」

『メモリスロットの一つに何でも良いからメモリを入れて下さい。』 零はその言葉に従い腰に着けたポーチから何と『A』と書かれたガイアメモリを取り出しそれを小手に装填する。

『アクセル！！』

『アクセルムーブ』

そのボイスが流れると……零の姿が一瞬で消えジュエルシードを一度切り裂きその背後に移動した。

は、速い……！

「凄い……凄いや！」

零は『-』と書かれているガイアメモリと『-』と書かれているガイアメモリを取り出しそれを『アクセルメモリ』と交換する。

『トリガー！！』

『ルナ！！』

『『射手の記憶』を確認。

これよりソードモードからトリガーモードに移行します。』 そして零が手に持っている長剣がライフルに変形する。

「くらええええええええええ！」

零が空中に弾丸をばらまくと弾丸が途中で曲がり全てジュエルシードに炸裂する。

「はー？ 見惚れてる場合じゃねえ！」

デバイスの『カリバーン』を持ち直し慌てて俺も戦いに参加する。

『龍砲……発射！』

龍砲が次々と炸裂しジュエルシードがたらを踏む。

「ごめん、一人とも待たせちゃったね！」

「行かねばよ。」

星！なのは！契約が完了したんだな！

「（……よし）リヴァイブ、決めたいんだけどどうすれば良いの？」

・・・・・射手の詰憶をそのままアリバ川に装填して下さい

そして零は左手からトランカーブラジャーを出し、右手は袋掉する

『トリガーライブ！』

「『トリガーイクスバスター』……」

ライフルの銃口が広がりそこから巨大な魔力砲撃が飛び出した。

そして……そのままなのはがジュエルシードを封印し、その日の戦いは終結した。

第五話（後書き）

如何でしたか？

次回はゼロムとしてルナ、負け犬、星と海鳴温泉で戦闘します。

次回『獅子とチートと氷撃』

お楽しみ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4657z/>

第二の人生はゲームらしいです～『イレギュラー』

2011年12月18日23時46分発行